

■浅井忠 洋画家、工芸図案家。洋画を日本人のものとして確立、留学後、京都で、洋画家や工芸家を指導し、早世。

あさいちゆう

松下村塾・1856= 江戸木挽町の佐倉藩屋敷で、堀田正睦に仕える軍学者浅井常明の長男に生まれる。母はきり。名は常保。

桜田門外変・1860= 4歳：

8月18日政変 1863= 7歳：祖父に続いて父が死去し、家督を相続するとともに、婦女子を江戸から避難させる藩命で佐倉に移住。

禁門の変・1864= 8歳：絵画に関心抱き、佐倉藩の南画家黒沼槐山に師事、槐庭の号を受け、画帖を残す。

薩摩藩士密航 1865= 9歳：藩校の分校(武学堂)で剣術・馬術・水泳を修め、書を平林晩香に学び、

大政奉還・1867=11歳：卒業とともに、教師の助手となる。

明治維新・1868=12歳：維新による新戸籍で忠と改名。

大学の(温故堂)で漢籍を修めた後、

明治6年政変 1873=17歳：父の同僚だった西村茂樹を頼って一家で上京、箕作秋坪の塾などで英学を修め、

佐賀の乱・1874=18歳：

成島柳北に漢学を学んだのち、

三つの反乱・1876=20歳：国沢新九郎が開いた日本初の洋画塾(彰技堂)に入門、国沢の勧めで、同年創立された工部美術学校に第1期生として入学し、フォンタネージに師事、その画風を同僚のなかでも一番に受継ぐが、

西南戦争・1877=21歳：西南戦争の余波でフォンタネージのが辞任帰国してしまい、後任フェレッティと折合い悪かったらしく、

大久保暗殺・1878=22歳：小山正太郎、松岡寿らとともに退学、東京師範学校の教壇に立つもすぐに退職し、結成した(十一字会)で洋画研究を続け、柳源吉と絵画技法記した習画帖を著すなどして生活、この間、来日したフェノロサと賛同した岡倉天心によって、日本絵画の再評価され、西洋画への関心が薄れて、

明治14年政変 1881=25歳：内国絵画共進会への洋画出品拒否、

岩倉具視没・1883=27歳：工部美術学校の閉校など、洋画の受難期となるなか、

フェノロサが説いた美術家による図案作成の必要性に強く共鳴、

国民之友始・1887=31歳：*東京工芸品共進会に油絵2点を出品、妙技二等賞となった「寒駅霜晴」をイギリス人が購入、

帝国憲法発布 1889=33歳：小山正太郎・山本芳翠らと、*(明治美術会)の創立に参加、第1回展に出品した「春畝」や第2回展の「収穫」はフォンタネージの域を脱し、日本固有の風土に根ざした独自のリアリズムの最初の達成として高い評価。

大本教・・・1892=36歳：岡倉天心を主軸とする洋画排斥運動が激しくなると、本郷に(明治美術会)の仮教場を開いて対抗、

郡司千島探検 1893=37歳：仮教場は明治美術学校となり、フランスから帰国した黒田清輝も参加するが、

日清戦争始・1894=38歳：日清戦争に従軍となり、

日清戦争終・1895=39歳：帰還後、第4回内国勲業博覧会の審査官として出品した油彩「旅順戦後の搜索」が妙技二等賞(黒田が出品した「朝妝」で裸体画論争、自らは時期尚早論を述べてきたため衝撃)一方、明治美術学校の教授を勤めるも、

白馬会・・・1896=40歳：黒田らが(白馬会)を結成するなどして、閉校となってしまう。

西洋画への世間の嫌悪も消えて行くなか、

子規句歌革新 1898=42歳：騒動で美術学校校長岡倉天心が追放され、明治美術会系を代表する形で東京美術学校教授となるも、

Bushidou・・・1899=43歳：黒田の待遇とは大きな差で、すぐにパリ万博鑑査官を任じられ、西洋画研究も命じられて、

ビアノ国産化・1900=44歳：フランス留学、特定の師につくことなく、グレー村中心に自由に過し、陶磁器絵付けや工芸図案など他分野への関心も深め、万博会場で見たとバネストリーのもとに正岡子規と約束していた(ホトトギス)の表紙絵を制作、中澤岩太と出会って共鳴、彼が新設しようとしていた京都高等工芸学校の教授赴任も約束し、教材となるポスター類の蒐集にも努めるなどして、

田中正造直訴 1901=45歳：その間、(明治美術会)を後輩の若者らが解散して、新たに(太平洋画会)を興し、古巣も追われてしまう。

教科書疑獄・1902=46歳：「グレーの秋」を描いた後、欧州各都市を回って*帰国。京都高等工芸学校教授に赴任し、京都に移住。

日比谷公園・1903=47歳：洋画家の集まりでの決議を受け(聖護院洋画研究所)を開き、図案家・陶芸家の研究団体(游陶園)を組織。

日露戦争終・1905=49歳：東宮御所造営局から壁飾錦織の図案「武士の山狩」を委嘱される。多くの工芸図案を制作して貢献。

満鉄発足・・・1906=50歳：関西美術院を創立するなど、京都洋画壇の中心として活躍、

韓国反日暴動 1907=51歳：陶磁器中心の工芸店(九雲堂)を開き、文部省美術展覧会の審査員として上京、戻ると入院し、*没した。没後まもなく木版図案集「黙語図案集」や「黙語日本画集」が刊行された。

研究所、美術院からは津田青楓、安井曾太郎、梅原竜三郎、黒田重太郎らが輩出し、浅井の教育家としての側面も看過できない。